

111年目の中原淳一

Junichi Nakahara: Year 111

2024年6月29日(土)ー 9月1日(日)

※会期中、一部展示替えあり

前期：6月29日(土)ー 8月4日(日)

後期：8月6日(火)ー 9月1日(日)

展覧会の会期・開館時間・イベント等が変更・中止となる場合がございます。最新情報は当館HPまたはSNS等でご確認いただきますようお願いいたします。



①中原淳一《表紙原画(『それいゆ』第39号)》1956年 個人蔵 ©JUNICHI NAKAHARA / HIMAWARIYA

◆展覧会概要

イラストレーション、雑誌編集、ファッションデザイン、インテリアデザインなどマルチクリエイターと呼ぶべき多彩な活動で知られる中原淳一(1913-1983)。彼は、戦前に雑誌『少女の友』でデビューをし、挿絵や表紙を手がけ人気を博したほか、編集にも関わっていきました。1937年に日中戦争が勃発すると、戦時色が強まる中で同誌を去ることを余儀なくされます。しかし、中原の雑誌制作への情熱は絶えることはなく、終戦の翌年の1946年には自身が編集長を務める『それいゆ』を創刊。その後も『ひまわり』、『ジュニアそれいゆ』、『女の部屋』などの雑誌を手がけていきました。

中原の生誕111年目を記念し開催される本展では、こうした数々の雑誌に掲載された挿絵や表紙の原画をはじめ、デザインした衣服、アーティストとして制作した絵画や人形など、中原の仕事の全貌に迫ります。「再び人々が夢と希望を持って、美しい暮らしを志せる本をつくりたい」という想いのもと、中原が生み出したこれらのクリエイションの数々を通じて、今もなお色褪せることのない魅力を紹介します。

◆展覧会構成

1章 新しい少女のために

中原は、1932年から『少女の友』の専属画家として挿絵や表紙絵を描き、やがて編集にも深く関わった。

中原の描く大きな瞳と細長い手足の少女像に、当時の少女たちは自身の理想の姿を見出し、あるいは自分自身を重ねた。また、こうした少女像は、後に少女漫画へと引き継がれていった。

日中戦争の長期化に伴い戦時色が強まると、中原の描く少女は「華美で不健康」とされ、1940年に同誌を去る。好ましい少女のイメージが、戦時下の社会では一転して非難の対象となった。

その後、中原は初の著作となるスタイルブック『きものノ絵本』を発売し、爆発的な売上を記録した。1939年には自身がデザインした商品を扱う店「ヒマワリ」を開店。便箋や封筒、アルバムや手帳から洋服まで、一目で中原がデザインしたと分かる「淳ーグッズ」を販売した。これは、今日私たちが日常的に目にするキャラクターグッズの先駆けといえるだろう。

2章 美しい暮らしのために

戦後間もない1946年に、中原は『ソレイユ』（8号以降『それいゆ』と改名）を創刊する。同誌では、「美しい暮らし」を目指す様々な提案が示された。通常の「暮らし」すら困難であった敗戦後の混乱期に中原のいう「美しさ」とは、知性や審美眼を鍛えていくことでこそ得られるものであった。『それいゆ』には、オリジナルの洋服のデザインを載せた連載や、髪型、美容、インテリア、手芸など衣食住を「美しく」整えるよう説く記事とともに、文学、音楽、美術などに関する内面を磨くための記事も多数掲載されている。

同誌は、中原が病に倒れる1960年まで刊行された。それは、戦後復興から高度経済成長期へと向かう社会のなかで、暮らしとその基盤となる価値観や美意識が大きく変化し、様々な流行が生まれた時期であった。しかし中原は、流行を追いかけるだけではなく、読者自身が衣食住を知性によってコントロールして初めて、自分らしい「美しい暮らし」が実現できる、という強い信念を持っていた。

3章 平和な時代の少女のために

中原は『ソレイユ』を刊行した翌1947年、月刊誌『ひまわり』を創刊した。子どもでも大人でもない「少女」を対象とした同誌において中原は、10代の読者たちが「よき少女時代」を送るため、美しくあることに遠慮する必要はない、ただ、無反省に着飾るのではなくあなたらしくあれ、と呼びかけた。連載「みだしなみせくしよん」では、最新スタイルの紹介に加え、着こなしやヘアスタイル、小物選びなど、ファッションに関する事柄を絵と文章で丁寧に解説した。



②左：中原淳一《『少女の友』第33巻第12号》1939年 個人蔵

③右：中原淳一《『ファッションブック』》（『少女の友』第30巻第8号付録）

1937年個人蔵



④中原淳一
《扉絵原画(『きものノ絵本』)》
1940年 個人蔵



⑤中原淳一
《表紙原画(『それいゆ』第31号)》
1954年 個人蔵



左：⑥中原淳一《扉絵原画(『中原淳一ブラウス集』)》1955年 個人蔵

右：⑦中原淳一《アップリケのフレアスカート》1955年 個人蔵

撮影：岡田昌紘 デイレクション：Gottingham

※いずれの作品画像にも、キャプションの末尾にコピーライト表記を入れてください。 ©JUNICHI NAKAHARA / HIMAWARIYA

さらには、川端康成らによる小説のほか、名作文学などの読み物も多く掲載され、中原が、少女たちの「美しさ」のためには文学や教養も重要だと考えていたことがわかる。

1951年から約1年間中原がパリに滞在すると、その間に雑誌の売り上げが減少。翌年に『ひまわり』は廃刊となるが、その後の1954年に『ジュニアそれいゆ』が創刊された。アメリカの雑誌『セブンティーン』を意識し、日本の「新しい型の少女雑誌」を目指した同誌では、写真のページが大幅に増え、中原のデザインした服が仕立て方の解説や型紙とともに多数紹介された。「よき少女時代」を送るという中原の編集方針に沿いながら、その内容と表現方法を時代にあわせて変化させていったことがわかる。

4章 中原淳一の原点と人形制作

多彩な仕事をした中原だが、そのキャリアは1930年の人形作家としてのデビューに始まる。1920年代後半「手芸」として人形を作ることが都市部に住む中間層の女性の間で流行したが、中原はこの頃に手芸店の店頭飾られた毛糸人形に触発されて人形を作った。そして、19歳の時に趣味で制作したフランス人形が評判となり、1932年、松屋銀座で人形展が開催された。

中原は雑誌でも、読者たちに人形作りを提案していた。1959年に過労により倒れてからは第一線を退き、1960年代は療養生活を送るが、この時期にも、身近な材料から男性の人形を制作している。

中原は人形制作について「像（かたち）をつくってその像（かたち）の中に感情を入れてゆくことのできる点で、一番、芸術的な手芸」と語っている。彼にとって人形は、作り手の自己や憧れを映し出す媒体として、愛情を注ぐ対象として、さらにはそれが置かれる空間を美しく飾るオブジェとして、生活の場でさまざまに機能する特別なものであった。

※いずれの作品画像にも、キャプションの末尾にコピーライト表記を入れてください。
©JUNICHI NAKAHARA / HIMAWARIYA

◇会期中イベント

●記念講演会「父・中原淳一との思い出」

日時：7月20日（土） 午後2時～（約1時間）

講師：中原芙蓉氏（中原淳一長女） 聞き手：当館学芸員

場所：地下2階ホール

*無料（要入館料） *定員70名（要事前申込、応募者多数の場合は抽選）

●アートトーク「中原淳一展開催にあたって」

日時：8月18日（日） 午後2時～（約1時間）

講師：中原利加子氏（株式会社ひまわりや 代表取締役／本展監修者）

場所：地下2階ホール

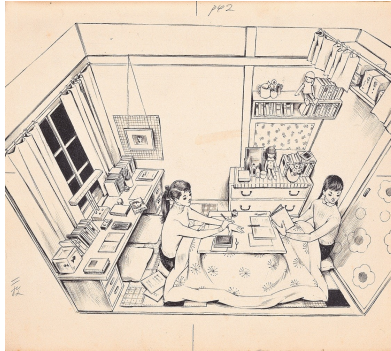
*無料（要入館料）

*定員70名（要事前申込、応募者多数の場合は抽選）

●学芸員によるギャラリートーク

7月13日（土）、7月28日（日）、8月23日（金）
各日午後2時～（約40分）

*無料（要入館料） *事前申込不要



上左：⑧中原淳一《表紙原画（『ひまわり』第6巻第9号）》1952年 個人蔵

上右：⑨中原淳一《表紙原画（『ジュニアそれいゆ』第24号）》1958年 個人蔵

左：⑩中原淳一《冬のお部屋の工夫をしましょう（『ジュニアそれいゆ』第7号原画）》1956年 個人蔵



⑪中原淳一《三人のスリ》1962年 個人蔵

●夏休み子ども美術教室「アップリケでタペストリーを作ろう！」

中原淳一デザインのアップリケの図案をつかって、オリジナルのタペストリーを作ります。

*本ワークショップでは縫い針を使用します。小学校4年生以下の方は保護者の同伴をお願いいたします。

日時：8月2日（金）／3日（土） 各日午後2時～4時

講師：宇山あゆみ氏（人形作家）

対象年齢：小・中学生（保護者同伴可）

場所：地下2階ホール

*無料 *定員各日12名（要事前申込、応募者多数の場合は抽選）

●館内建築ツアー

白井晟一設計の美術館建築を職員がご案内します。

日時：会期中の金曜日 各日午後6時～（約40分）

*無料（要入館料） *各回定員20名（事前申込不要）

◎イベント申込方法

往復はがきまたは当館HPの申込フォームにて承ります。

記念講演会とアートトークは1通につき1名、夏休み子ども美術教室は1通につき2名のお申込みが可能です。応募者多数の場合は抽選となります。

【往復はがき】〒・住所・氏名（ふりがな）・日中連絡のつく電話番号、参加希望のイベント名をご記入の上、中原淳一展イベント係まで。また、夏休み子ども美術教室にお申込みの方は、参加希望日程およびお子様の学年もご記入ください。

【申込フォーム】

当館ホームページ上の各イベントフォームからお申込みください。

※締切（いずれも必着） ①記念講演会：7月1日（月） ②アートトーク：7月29日（月） ③夏休み子ども美術教室：7月11日（木）

※迷惑メール等の受信制限をされている方は、事前に当館からのメール「@shoto-museum.jp」が受信できるようにドメイン設定をお願いいたします。

◇開催概要

展覧会名 111年目の中原淳一 *Junichi Nakahara: Year 111*

会期 2024年6月29日（土）－9月1日（日） ※会期中、一部展示替えあり
前期：6月29日（土）－8月4日（日） 後期：8月6日（火）－9月1日（日）

開館時間 午前10時～午後6時（毎週金曜日は午後8時まで） *入館は閉館時間の30分前まで

入館料 一般1000円(800円)、大学生800円(640円)、高校生・60歳以上500円(400円)、
小中学生100円(80円)

***リピーター割引：観覧日翌日以降の本展期間中、有料の入館券の半券と引き換えに、通常料金から2割引きでご入館できます。**

*（ ）内は団体10名以上及び渋谷区民の入館料 *土・日曜日・祝休日及び夏休み期間は小中学生無料

*毎週金曜日は渋谷区民無料 *障がい者及び付添の方1名は無料

休館日 月曜日(7月15日、8月12日は開館)、7月16日(火)、8月13日(火)

主催 渋谷区立松濤美術館、朝日新聞社

協力・監修 ひまわりや

企画協力 島根県立石見美術館

会場 渋谷区立松濤美術館 〒150-0046 東京都渋谷区松濤2-14-14
電話：03-3465-9421 HP：https://shoto-museum.jp

交通案内

●京王井の頭線 神泉駅下車徒歩5分

●JR・東京メトロ・東急電鉄 渋谷駅下車徒歩15分

※駐車場はございません

◇次回展覧会のご案内

「空の発見」

2024年9月14日（土）～11月10日（日）

報道関係のお問い合わせ

広報担当 pr-sma@shoto-museum.jp 電話：03-3465-9421 FAX：03-3460-6366

* 画像をご希望の場合は、作品名の前にある番号をお知らせください。 * 画像のご利用後、データは破棄してください。
* 画像の使用は、本展のご紹介をいただける場合のみとしてください。 * 基本情報確認のため、一度校正をお送りください。
* 掲載後、見本誌をご送付いたしますようお願いいたします。